

韓国人日本語学習者の不満表明に関する一考察 - 不満表明ストラテジーの場面別使用傾向 -

李 善姫

名古屋大学国際言語文化研究科大学院生

1. はじめに

日本語学習者の「不満表明」を取り上げた研究はまだ少ない(初鹿野他 1996, 朴 2000, 李 2004)。その中で, 李(2004)では, 日本語母語話者に比べ, 韓国人学習者の方がより FT 度の高いストラテジーを用いている, との結果を得ている。しかし, どういう場面で学習者の FT 度が高くなるのかに対する考察が行われていないため, 学習者の不満表明の実態を把握しにくいことが考えられる。

そこで, 本稿では日本語母語話者, 韓国語母語話者, 韓国人日本語学習者を対象とし, 各グループの場面別不満表明ストラテジーの使用傾向を比較することにより, 韓国人日本語学習者の不満表明の実態を探ることを目的とする。

2. 調査の概要

- ・被験者：日本語母語話者(以下, JJ) 40 名, 韓国語母語話者(以下, KK) 40 名, 上級レベルの韓国人日本語学習者 80 名(JSL 40 名, JFL 40 名)
- ・データ収集法：談話完成テスト(以下, DCT)
- ・調査時期と場所：2003 年 6 月から 8 月, 名古屋とソウル

3. データの分析方法

本稿では DCT により得られたデータを, Olshtain and Weinbach (1993) と Laforest(2002)にならい, 不満表明において相手のフェイスを脅かす度合い(the degree of face-threat, 以下 FT 度)から不満表明ストラテジーを分類した。ここで用いたストラテジーは, その数値が大きくなるにつれ, FT 度が高くなるのみならず。

表 1 不満表明ストラテジーの分類

Str1 不満を表明しない	Str4 明示的な不満表明	Str7 警告・脅かし
Str2 遠まわしな不満表明	Str5 改善要求	Str8 非難
Str3 理由・説明の要求	Str6 代償要求	

4. 結果と考察

本稿では各グループの場面別不満表明ストラテジーの使用傾向を比較する際に, 藤森(1997)にならい, 場面を大きく 3 つ - 修復可能な場面, 修復不可能な場面, 交渉場面⁽¹⁾ - に分けて考察を行う。各グループの場面別ストラテジーの使用傾向

は異なっているが、本稿では主に JJ に比べ、韓国人日本語学習者の FT 度が高くなっている場面を取り上げ、考察を行う。

4.1 修復可能な場面 - 場面 4「授業」と場面 7「割り込み」を例に -

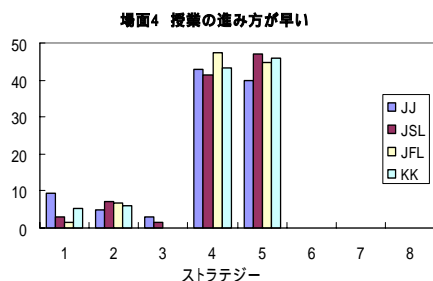


図 1 場面 4 の Str の使用割合 (%)

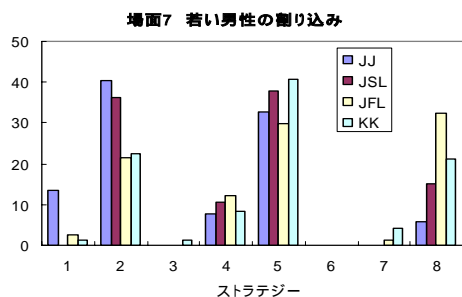


図 2 場面 7 の Str の使用割合 (%)

図 1 にみるように、不満を言うことによって好ましくない状況がすぐ変えられる可能性の高い場面では、すべてのグループで不満の状況に言及したり (Str4)、また相手に不満の状況を変えてくれるよう改善を要求したり (Str5) するという点が共通していた。

次に、修復可能な場面として、場面 7「割り込み」を取り上げる。図 2 にみるように、場面 7 では「ここ並んでいるんですけど」のような、Str2「遠まわしな不満表明」と以下の例のような、Str8「非難」の使用率にグループ間大きな差がみられた。

1) 目の不自由な方ですか。何にも見えませんか。 【JFL38】

2) 어이 장난하냐? 줄 서 있는거 안 보여? 【KK13】

(おい、ふざけるな。並んでいるのが見えないのか?)

実際、FT 度からみたグループ間ストラテジーの使用には有意な差がみられた ($F(3, 156) = 13.015, p < 0.001$)。つまり、場面 7「割り込み」では、JJ に比べると、KK, JSL, JFL の方がより FT 度の高い言い方をしている。

4.2 修復不可能な場面 - 場面 2「遅刻」と場面 6「CD の損傷」を例に -

表 2 は、場面 2「遅刻」において、FT 度から各グループのストラテジー使用を比

表 2 FT 度からの比較 (#2)

被験者グループ	平均	標準偏差
JJ	5.03	2.20
JSL	6.28	2.05
JFL	6.80	1.54
KK	6.63	1.58

較したものである。ここで、FT 度からグループ間ストラテジーの使用を比較したところ、グループ間に有意な差がみられた ($F(3, 156) = 7.379, p < 0.001$)。つまり、JJ に比べ、KK, JSL, JFL の方がかなり FT 度の高い言い方をしているといえる。

この場面で、JSL と JFL の場合、例 3), 4) のような、Str8「非難」の使用率 (JJ :

15.94% JSL : 21.05% JFL : 24.24% KK : 16.67%)がかなり高くなっている。

3)もう、お前とは映画なんか見ない。絶対！ お前を信じた俺がバカだ!【JSL24】

4)もう、だめだ。君なんてまっぴらごめんだ。 【JFL40】

表 3 FT 度からの比較 (#6)

被験者グループ	平均	標準偏差
JJ	3.28	2.14
JSL	3.60	2.19
JFL	4.28	2.29
KK	4.85	2.23

次に、場面 6「CD の損傷」を取り上げる。

表 3 にみるように、FT 度からグループ間ストラテジー使用を比較した結果、JJ と KK との間には有意な差がみられた ($p < 0.05$) が、JJ と JSL、JFL との間には有意な差はみられなかった。

場面 2「遅刻」と場面 6「CD の損傷」の場合、修復不可能な場面であることと、不満表明の相手が「親友」である点で共通している。ところが、「遅刻」に対する不満表明では、JSL・JFL の場合、FT 度の高いストラテジーを用いていることが分かる。Olshtain and Weinbach(1993:118-119)では、社会的義務(social obligation)がはっきりしている場合の不満表明において、学習者は礼儀などを気にせずに、相手を非難する傾向があると指摘している。今回の調査においても、同様のことがいえる。つまり、JSL と JFL の場合、前に述べた場面 7「割り込み」や場面 2「遅刻」のような、社会的な義務が明確な場合は相手に対する儀礼などを気にせず、相手を非難する傾向があり、それが FT 度からみたストラテジー選択において JJ との間に大きな差を生み出しているのではないだろうか。

4.3 交渉場面 - 場面 1「水道料金の値上げ」と場面 8「成績」を例に -

まず、交渉場面として場面 1「水道料金の値上げ」を取り上げる。JJ の場合、例 5) のような、Str3「理由・説明の要求」を最も多く使っており、他グループとの使用頻度の差が著しい (JJ:34.33% JSL:19.72% JFL:12.70% KK:18.52%)。一方、KK は Str7「警告・脅かし」(JJ:1.49% JSL:5.63% JFL:6.35% KK:17.28%)、Str8「非難」(JJ:7.46% JSL:4.23% JFL:6.35% KK:17.30%)の使用がかなり多くなっている。

5)失礼ですが、どうして値上げになったのか理由を教えてくださいか。【JJ1】

一方、JSL・JFL 共に「ちょっと高いと思いますが」のような、Str4「明示的な不満表明」の使用がかなり多い。ここで、FT 度からグループ間ストラテジー使用を比較した結果、グループ間に有意な差がみられた ($F(3, 156) = 6.938, p < 0.001$)。つまり、JJ と KK のストラテジーの選択 (JJ:3.68 KK:5.65) にはかなり有意な差がみられた。また、KK と JSL との間には有意な差 (KK:5.65 JSL:4.15) がみられ、JJ と JFL との間には有意な傾向 (JJ:3.68 JFL:4.58) がみられた。

次に、場面 8「成績」を取り上げる。JJ の場合、この場面において、場面 1「水道料金の値上げ」と同様、Str3「理由・説明の要求」の使用が最も多くなっている。一方、KK と JSL、JFL の場合は「成績が少し低く評価されたみたいですが」のような、Str4「明示的な不満表明」や「もう一度評価してください」のような、Str5「改善要求」を多用している。その中で、JSL の場合、Str2「遠まわしな不満表明」を多用している。ここで、FT 度からグループ間ストラテジー使用を比較したところ、グループ間に有意な差がみられた ($F(3, 156) = 5.888, p < 0.001$)。つまり、JJ と KK (JJ:2.38 KK:3.63)、JJ と JFL (JJ:2.38 JFL:3.60) との間に有意な差がみられた。ここで注目したいのは、各グループの Str5「改善要求」の使用率である。JJ の場合は Str5「改善要求」の使用は 1 例もなく、JSL の場合もその使用率(8.20%)は低いのに対して、JFL(22.54%)と KK(23.38%)の使用率はかなり高い。この結果から日・韓両言語社会において、「成績」に関する受け止め方が違うことが窺える。

以上、場面 1「水道料金の値上げ」、場面 8「成績」のような、交渉場面では JJ の場合は相手に説明の機会を与え、交渉の余地を残している Str3「理由・説明の要求」を多用する傾向があることが指摘できる。また、これらの交渉場面では FT 度からみたストラテジー選択において、JJ と JSL との間には有意な差がみられなかったのに対して、JJ と JFL の間には有意な差がみられた。

5. おわりに

本稿では韓国人日本語学習者の場面別ストラテジーの使用傾向を調べたところ、「割り込み」や「遅刻」のような場面では、JSL、JFL 共に FT 度の高いストラテジーを用いる傾向があり、「水道料金の値上げ」場面や「成績」場面のような、交渉場面では JJ と JFL とのストラテジー選択がかなり異なっていることが分かった。

注

(1)「修復可能な場面」というのは、場面 5「騒音」のように、相手に「うるさい」という不満を表明することによって、うるさい状況がなくなる可能性が高い場面を指す。「修復不可能な場面」というのは、場面 2「遅刻」のように、遅れてきた友だちに「おそい」と不満を伝えても遅れてきた事実は修復できないというような場面を指す。また「交渉場面」とは、場面 8「成績」のように、「成績が思ったより低い」と相手に不満を伝えても、不満の状況がすぐ修復できるとは言えず、相手との交渉(negotiation)が必要な場面を指す。

参考文献

- 李 善姬 (2004)「韓国人日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育』123号(掲載予定)日本語教育学会
- 藤森弘子 (1997)「不満表明ストラテジーの日英比較 - 談話完成テスト法の調査結果をもとに - 」『言語と文化の対話』英宝社 pp.243-257.
- Laforest, M.(2002) Scenes of family life: complaining in everyday conversation. *Journal of Pragmatics* 34, 1595-1620.
- Olshain, E. and Weinbach, L.(1993) *Interlanguage Feathers of the Speech Act of Complaining*, *Interlanguage Pragmatics*: Oxford University Press. 108-122.